

調査報告

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

白山利信

ここ十年来、国際化・情報化の流れの中で英語以外の外国語教育を実施する高等学校が急速に増加している。その中でロシア語科目を設置している高校も大幅に増え、1998 年度現在、約 20 校でロシア語教育が行われている。

本稿では、まずより広い視点から、高等学校における英語以外の外国語教育の実施状況やその推移を概観し、次にロシア語設置校の基本的な特徴をいくつか指摘した上で、ロシア語教育の現状と歴史を可能な限り詳しく見ていく。さらに、青森県立青森南高等学校で実施した、ロシア語学習に関するアンケート調査と実際にロシア語教育に携わる教師への取材などを通して明らかになった、現在の高等学校におけるロシア語教育の成果と課題を報告したい。

1. 高等学校における英語以外の外国語科目の設置状況

表 1 は、1997 年度の日本の高等学校における英語以外の外国語科目の設置状況である。まず目を引くのは、中国語と朝鮮・韓国語の設置校の多さである。特に中国語開設校は、すでに 300 校を越え、フランス語以下の言語と比較して群を抜いており、近年の我が国における中国人気を象徴しているかのようである。朝鮮・韓国語も、設置校数ではフランス語に次ぎ、第二外国語の老舗であるドイツ語を上回っている。スペイン語の設置校数も相対的に多く、ドイツ語と比べてもさほど見劣りはしない。ロシア語は、上位 5 つの言語と比較すると数は少ないが、英語以外の外国語科目としての社会的・伝統的位置づけの低さや昨今の深刻なロシア情勢等のマイナス要因を考慮すると、むしろロシア語教育を実施している高校が意外に数多くあるものだという印象を受ける。

次に興味深いのは、開設言語が 22 にも及び、非常に多彩な点である。中国語からポルトガル語までの上位 8 つの言語は、複数の高校で設置されているが、アラビア語からモンゴル語までの 13 の言語は、慶應義塾志木高校（埼玉県）のみでの開設である。同校では、上位 8 つの言語にこれら 13 の言語を加えた、計 21 言語の語学教育が行われている（詳細は、白山 1999b: 74-79 頁を参照）。また、最後のマレー語は、広島県立安芸府中高校での開設である。'

臼山利信

表1 高等学校における英語以外の外国語科目の設置校数

1997年7月1日現在

外国語		設置校数		
		公立	私立	計
1	中国語	201	102	303
2	フランス語	101	90	191
3	朝鮮・韓国語	64	39	103
4	ドイツ語	55	42	97
5	スペイン語	47	21	68
6	ロシア語	11	10	21
7	イタリア語	1	6	7
8	ポルトガル語	3	2	5
9	アラビア語	0	1	1
10	インドネシア語	0	1	1
11	ベトナム語	0	1	1
12	古典ギリシャ語	0	1	1
13	古典ラテン語	0	1	1
14	サンスクリット語	0	1	1
15	スワヒリ語	0	1	1
16	タイ語	0	1	1
17	トルコ語	0	1	1
18	ビルマ語	0	1	1
19	ヘブライ語	0	1	1
20	ペルシャ語	0	1	1
21	モンゴル語	0	1	1
22	マレー語	1	0	1
計（のべ数）		484	325	809

文部省初等中等教育局高等学校課資料に基づき作成

2. 高等学校における英語以外の外国語科目設置校数の推移

表2は、最近10年ほどの、高等学校における英語以外の外国語科目の設置校数の推移である。この表を見ると、この間、中国語からロシア語までの上位6つの言語の設置校数がかなり増加していることがわかる。中でも目立つのが、中国語と韓国・朝鮮語の設置校数の急激な増加である。

表3は、1986年度を基準とした、上位6言語の設置校数の累積増加率の推移で、ここから各言語の増加の割合がより明確に把握できる。特に、朝鮮・韓国語と中国語の累積増加率の高さが際立っている。ロシア語については、基準年度（1986）の設置校数が2校だけであったため、上位5つの言語に比べて、設置校数そのものはそれほど多くないにもかかわらず、累積増加率が相対的に高くなっている。一方、フランス語、ドイツ語、スペイン語の増加率は、中国

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

表2 最近10年の高等学校における英語以外の外国語科目設置校数の推移

	外国語	1986	1988	1990	1993	1995	1997
1	中国語	46	71	111	154	192	303
2	フランス語	75	89	109	128	147	191
3	朝鮮・韓国語	7	14	24	42	73	103
4	ドイツ語	43	54	63	73	75	97
5	スペイン語	19	21	32	40 ※	43	68
6	ロシア語	2	4	6	11	20	21
7	イタリア語	4	4	3	4	5	7
8	ポルトガル語	1	1	2	2	2	5
9	スウェーデン語	1	1	—	—	—	—
10	アラビア語	—	—	—	—	1	1
11	インドネシア語	—	—	—	—	1	1
12	ベトナム語	—	—	—	—	1	1
13	古典ギリシャ語	—	—	—	—	1	1
14	古典ラテン語	—	—	—	—	1	1
15	サンスクリット語	—	—	—	—	1	1
16	スワヒリ語	—	—	—	—	1	1
17	タイ語	—	—	—	—	1	1
18	トルコ語	—	—	—	—	1	1
19	ビルマ語	—	—	—	—	1	1
20	ヘブライ語	—	—	—	—	1	1
21	ペルシャ語	—	—	—	—	1	1
22	モンゴル語	—	—	—	—	1	1
23	マレー語	—	—	—	—	—	1

文部省初等中等教育局高等学校課資料に基づき作成

※文部省の資料では、スペイン語の他にイスパニア語という項目を別に設けているが、同じ言語と見なされるのでイスパニア語1校をスペイン語39校に合算し、スペイン語40校とした。

語、朝鮮・韓国語、ロシア語のそれと比較すると非常に緩やかで、設置校数の安定した増加傾向を示している。

3. 英語以外の外国語教育の二つの流れ

戦後の高等学校における英語以外の外国語教育の実施には、二つの大きな流れが存在するように思われる。一つは、ごく一部の新制高等学校において、戦前の旧制中学、旧制高校、あるいは高等女学校の教育課程の伝統や遺産を引き継ぐ形で、終戦後早い時期から、多くの場合選択科目の第二外国語として例外的に開講されてきたものである。その典型的な例が、都立日比谷高校をはじめとする、かつてナンバースクールと呼ばれた一部の都立高校、すなわち、日比

臼山利信

表3 1986年度を基準とした上位6言語の設置校数の累積増加率の推移

		1986	1988	1990	1993	1995	1997
1	中国語 % 校数	— 46	54.3 (+25)	141.3 (+65)	234.8 (+108)	317.4 (+146)	558.7 (+257)
2	フランス語 % 校数	— 75	18.7 (+14)	45.3 (+34)	70.7 (+53)	96.0 (+72)	154.7 (+116)
3	朝鮮・韓国語 % 校数	— 7	100.0 (+7)	242.9 (+17)	500.0 (+35)	942.9 (+66)	1371.4 (+96)
4	ドイツ語 % 校数	— 43	25.6 (+11)	46.5 (+20)	69.8 (+30)	74.4 (+32)	125.6 (+54)
5	スペイン語 % 校数	— 19	10.5 (+2)	68.4 (+13)	110.5 (+21)	126.3 (+24)	257.9 (+49)
6	ロシア語 % 校数	— 2	100.0 (+2)	200.0 (+4)	450.0 (+9)	900.0 (+18)	950.0 (+19)

文部省初等中等教育局高等学校課資料に基づき作成

谷（旧制一中，独語・仏語），立川（旧制二中，独語），戸山（旧制四中，独語・仏語），小石川（旧制五中，独語・仏語），新宿（旧制六中，独語・仏語），北園（旧制九中，独語・仏語・中語），都立大附属（旧制府立高，独語），西（旧制十中，独語・仏語），青山（旧制十五中，独語・仏語），三田（旧制六女，独語・仏語）の10校である。これらの都立高校は，1948年に実施された戦後の学制改革とほぼ前後して，旧制中学校から新制高等学校として再出発した際に，かつての旧制高校の教育課程を強く意識し，いわば教養教育の一環として英語以外の外国語科目を設置した経緯がある。こうした背景もあり，当時設置された言語のほとんどがドイツ語とフランス語であった。

もう一つの大きな流れは，東西冷戦の終結，経済・情報分野の世界的一体化，日本経済の成熟化など，近年の国内外の著しい状況変化に伴い，これに主体的かつ柔軟に対応していくための弾力的な教育課程の編成・実施が教育現場でも可能になったことを受けて，多くの高校が特色ある多様な選択科目の一つとして，英語以外の外国語科目を積極的に導入するようになったものである。

表4は，1982-98年度の英語以外の外国語科目を設置している都立高校の数の推移である。表を見ると，1989年度のあたりを一つの境に，開設されている各言語の設置校数がしだいに増加していく様子がはっきり分かる。1989-98年度の10年間に英語以外の外国語を開設した都立高校の多くは，国際化の進展への対応を明確に意識した，国際学科という新しいタイプの学科（国際）や，

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

表4 都立高等学校における英語以外の外国語科目設置校数の推移（1982-98）

	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98
中国語	4	4	4	4	4	4	6	8	10	13	15	17	15	17	19	24	31
フランス語	12	11	12	12	14	14	15	15	16	17	18	17	21	23	24	28	30
ドイツ語	11	11	10	10	11	11	11	12	12	12	13	13	15	13	19	18	17
朝鮮語	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	3	2	4	5	6	6	7
ロシア語	1	1	1	1	1	1	1	2	2	2	3	3	2	2	2	2	2
スペイン語											1	1	1	2	2	3	3
イタリア語															1	1	1

東京都教育庁資料等に基づき作成

表5 設置言語別による都立高等学校一覧（1998）

英語以外の外国語科目	都立高等学校名
中国語、フランス語、ドイツ語、朝鮮語、スペイン語、ロシア語	◎国際
中国語、フランス語、ドイツ語、ハンブル、スペイン語	都立大附属
中国語、フランス語、ドイツ語、ハンブル	日比谷、西
中国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語	◎晴海総合
中国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語	北園
中国語、フランス語、ドイツ語、イタリア語	◎大泉学園
中国語、フランス語、ドイツ語	立川、◎小平
中国語、フランス語、ハンブル	◎狛江
フランス語、ドイツ語	三田、戸山、新宿、青山、竹早、小石川、八王子高陵
中国語、フランス語	向丘、◎飛鳥、深川
中国語、朝鮮語	葛西南（定）
中国語	◎一橋、◎羽田、◎千歳、第一商業、◎永福、◎光丘、◎北野、◎大山、◎東、◎富士森、◎東村山西、◎府中東、◎工芸（定）、◎武蔵（定）、◎第五商業（定）
フランス語	◎南、◎玉川、◎田柄、◎文京、竹台、南葛飾、◎武蔵村山東、◎篠崎、◎飛鳥（定）
ドイツ語	◎石神井
朝鮮語	南葛飾（定）

東京都教育庁資料等に基づき調査・作成

注）◎は、1989年度以降に英語以外の外国語科目をはじめて開設した高等学校。

従来の普通科の中に外国語コース（小平、深川）、国際コース（狛江）、国際文化コース（南）などの新しいタイプのコースを創設する際に、特色ある教育課程の実施を目指して、国際理解教育あるいは異文化理解教育の一環として英語以外の外国語科目を採用している。

表5は、1998年度現在の設置言語別による都立高校の一覧である。英語以外の外国語を開設している47校の都立高校のうち、実に6割（59.6%）に当たる28校が1989年度以降の、英語以外の外国語科目の新規設置校である。

臼山利信

表6 英語以外の外国語を設置している都立高等学校一覧（1998）

	全日制			定時制			計
	1年	2年	3年	2年	3年	4年	
中国語	千歳, 国際, 光丘, 北園	日比谷, 千歳, 都大附, 国際, 西, 光丘, 北園, 向丘, 飛鳥, 大山, 晴海総合, 富士森, 立川	一橋, 南, 羽田, 都大附, 千歳, 第一商, 国際 (2/4), 永福, 大泉学園, 向丘, 光丘, 北園, 北野 (2/5), 飛鳥 (2/4), 大山, 晴海総合, 東, 深川, 富士森立川, 小平, 東村山西, 府中東, 狛江		工芸, 葛西南	工芸, 葛西南, 武蔵, 第五商	31校のべ46校
フランス語	国際, 小石川, 北園	日比谷, 三田, 戸山, 都大附, 新宿, 青山, 国際, 西, 田柄, 竹早, 小石川, 北園, 飛鳥, 向丘, 晴海総合, 八王子高陵, 立川, 武蔵村山東	南, 都大附, 新宿, 玉川, 国際 (2/4), 田柄, 竹早, 向丘, 文京, 飛鳥 (2/4), 大泉学園, 小石川, 北園, 竹台, 晴海総合, 南葛飾, 深川, 篠崎, 立川, 武蔵村山東, 小平, 狛江	飛鳥	飛鳥	飛鳥	30校のべ46校
ドイツ語	国際, 小石川, 北園	日比谷, 三田, 戸山, 都大附, 新宿, 青山, 国際, 西, 竹早, 小石川, 北園, 晴海総合, 八王子高陵, 立川	新宿, 国際 (2/4), 都大附, 石神井, 大泉学園, 竹早, 小石川, 北園 (2/5), 晴海総合, 立川, 小平				17校のべ28校
朝鮮語		日比谷, 国際, 都大附, 西	国際, 狛江	南葛飾	南葛飾, 葛西南	南葛飾 (2/3), 葛西南	7校のべ11校
スペイン語	国際	国際, 都大附, 晴海総合	国際 (2/4), 晴海総合				3校のべ6校
ロシア語	北園	国際, 北園	国際				2校のべ4校
イタリア語			大泉学園				1校

東京都教育庁指導部資料等に基づく

注) 括弧内の数は単位数。記載がないのは2単位。

また、表6は、1998年度現在の英語以外の外国語科目を設置している都立高校のより詳細な実施状況を示したものである。

このように、都立高校における英語以外の外国語教育の諸状況を時代性あるいは社会変動といったより幅広い視野から眺め直してみると、高校の英語以外の外国語教育における大きな構造的な変化、すなわち、教養教育から国際理解教育あるいは異文化理解教育への質的な転換を読み取ることができる。従来、英語以外の外国語と言え、ドイツ語やフランス語と相場が決まっていたように、ヨーロッパ文化の移入・摂取を主たる目的とする教養重視の語学教育が主流を占めていた。日比谷高校や立川高校等、旧制中学を前身とする学校における初期の教育は、その典型と言えるだろう。しかし、1990年前後を一つの転

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

換期とする地球規模での国際化・情報化の流れの中で、ヨーロッパ以外の諸言語も学習しようという気運の高まりとともに、教養教育としての英語以外の外国語教育という構図がしだいに大きく崩れていき、国際理解あるいは異文化理解を重視する立場から英語以外の外国語教育に取り組む高校がすでに主流を占めてきていると考えられる（詳細は、臼山 1999b：36-57 頁を参照）。

4. 高等学校におけるロシア語教育の現状と歴史

表7は、筆者自身が1998年6月より1年以上にわたって全国の各ロシア語設置校を原則として訪問取材し、その聞き取り調査等に基づいてまとめたロシア語教育の現状である。1998年度現在、筆者の確認できた範囲では、全国で公立11校、私立8校、計19校の高校がロシア語を開設している。² この調査で明らかになった、高校におけるロシア語設置校の特徴は、まず首都圏を除くと、その所在地が北海道、東北、北陸を中心とする環日本海地域に集中していること（地域的偏在性）、さらに、これらの地域では、旧ソ連邦解体後に生じたロシアとの多様な地域間交流の拡大・活発化に対応する形で、言わば地元の地域的要請等によりロシア語科目が設置された学校が比較的多いことである（根室西、根室、青森南、秋田東、新潟商業、明鏡、伏木、富山南、敦賀気比）。したがって、ロシア語教育は基本的には教養教育としてではなく、地域性の色合いを非常に強く持った国際理解教育あるいは異文化理解教育の一助として実施されている。それに対して、首都圏などのロシア語設置校では、地域性という要素はほとんどなく、国際理解教育あるいは異文化理解教育を基本とした、複数ある多様な英語以外の外国語科目の一つとしてのロシア語教育という性格が強い（早稲田大学高等学院、北園、国際、慶應義塾志木、立教、芦屋大学附属）。

次に、ロシア語設置校の現状に個別的に触れながら、高等学校におけるロシア語教育の歴史を眺めていく。まず首都圏から見ていくと、都立高校でロシア語を設置した実績のある高校は北園、立川、国際の3校で、北園高校でのロシア語の開設は、戦後すぐに設置されたドイツ語（1947）、フランス語（1947）、中国語（1948）に続いて、1964年のことで、これは新制の公立高校の中では最も早い時期である。立川高校では、1948年にドイツ語が開講され、1970年にフランス語とロシア語が新設され、1974年には中国語も設置された。ロシア語は、生徒の受講希望者数に波があり、1994年以降、休講の状態が続いている。北園高校および立川高校のロシア語開設は、当時北園、立川の順に赴任

白山利信

表7 高等学校におけるロシア語教育の現状

(1998年4月1日現在)

	都道府県	高等学校	学科コース (C)	開設年	履修形態 ^{*1}	授業形態 ^{*2}	学年	単位数
1	北海道	☆札幌静修	国際	1992	必選	JT, RT	2	2
			国際		必選	JT, RT	3	2
2	北海道	根室西	普通	1994	選必	T・T	2	2
			普通		選必	T・T	3	2
3	北海道	☆双葉	普通・生活科学 C	1995	自由	JT	2	2
			普通・普通 C	1995	自由	JT	3	2
4	北海道	札幌国際情報	国際文化	1996	必選	RT	2	2
			国際文化		必選	RT	3	2
			普通		選必	RT	3	2
			情報技術		選必	RT	3	2
			情報システム		選必	RT	3	2
			流通サービス		選必	RT	3	2
5	北海道	根室	普通・文系 II 型	1996	選必	JT	3	2
			商業	1996	選必	JT	3	3
6	青森県	青森南	外国語	1994	必	T・T	1	2
			外国語		必	JT, RT	2	3
			外国語		必	JT, RT	3	3
7	秋田県	秋田東 (定)	普通 (単位制)	1994	必選	RT	1, 2, 3, 4 ^{*3}	2・4 ^{*4}
8	埼玉県	☆慶應義塾志木	普通	1991	課外 ^{*5}	JT	1, 2 ^{*6}	(2)
			普通		課外 ^{*5}	JT	1, 2 ^{*6}	(2) ^{*7}
			普通		語学課外 ^{*8}	JT	2, 3	(1) ^{*7}
9	埼玉県	☆立教	普通	1997	選必	JT	3	2
10	東京都	☆早稲田大学高等学院	普通	1920	必選	JT	1	3
			普通		必選	JT	2	4
			普通・理系 C		必選	JT	3	2
			普通・理系 C		選必	JT	3	2
			普通・文系 C		必選	JT	3	2
			普通・文系 C		選必	JT	3	2・4 ^{*4}
11	東京都	北園	普通	1964	選必	JT	1	2
			普通		選必	JT	2	2
12	東京都	国際	国際学	1991	自由	RT	2	2
			国際学		選必	RT	3	2
13	東京都	☆関東国際	外国語・ロシア語 C	1991	必	JT, T・T	1	6
			外国語・ロシア語 C		必	JT, T・T	2	6
			外国語・ロシア語 C		必	JT, T・T	3	6
			普通	1991	選必	JT, T・T	2	2
			普通		自由	JT, T・T	3	2
14	新潟県	新潟商業	商業・国際経済 C	1995	必選	T・T	2	2
			商業・国際経済 C		必選	T・T	3	3
			国際教養	1995	選必	T・T	2	2
			国際教養		選必	T・T	3	3
15	新潟県	新潟市立明鏡 (定)	普通 (単位制)	1998	自由	RT	1, 2, 3 ^{*3}	2
16	富山県	伏木	普通・国際 C	1927	選必	RT	2	3
			普通・国際 C		選必	RT	3	3
17	富山県	富山南	普通・国際 C	1995	課外授業 ^{*9}	JT	1	(1) ^{*7}
			普通・国際 C		課外授業 ^{*9}	JT	2	(1) ^{*7}
			普通・国際 C		課外授業 ^{*9}	JT	3	(1) ^{*7}
18	福井県	☆敦賀気比	国際・ロシア語 C	1993	必	JT	1	5
			国際・ロシア語 C		必	JT	2	6
			国際・ロシア語 C		必	JT	3	7
19	兵庫県	☆芦屋大学附属	国際文化	1985	必選	JT	2	2
			国際文化		必選	JT	3	2

☆は私立校

調査・作成：白山利信

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

- * 1 必修科目（必）とは、選択の余地なく履修する正課科目。必修選択科目（必選）とは、複数の同種教科・科目（ここでは外国語科目）の中から選択する必修の正課科目。選択必修科目（選必）とは、外国語科目を含む複数の異種教科・科目の中から選択する必修の正課科目。自由選択科目（自由）とは、複数の異種教科・科目の中から選択する正課科目ではあるが、卒業のために必修のものではなく、主体的な自由意志に基づいて履修する科目。
- * 2 授業形態の JT は日本人教師による単独の授業。RT はロシア人教師による単独の授業。JT, RT は日本人教師とロシア人教師がそれぞれ別々に行っている授業。T・T は日本人教師とロシア人教師によるティーム・ティーチングの授業。JT, T・T は日本人教師による単独の授業、あるいは日本人教師と外国人教師によるティーム・ティーチングのいずれかの形の授業。
- * 3 学年を越えた授業科目。
- * 4 2単位もしくは4単位が履修可能。
- * 5 正課の選択科目ではないが、1・2年次の必須選択科目で、正規のカリキュラムの時間帯に配置される「課外の科目」。単位認定はなく、成績は「概評」の名でつけられる。
- * 6 1・2年生共通の授業科目であるが、1年でロシア語を選択した者は、2年では別の「課外の科目」を選ばなければならない。
- * 7 括弧内の数字は、正課の単位数に対応する授業時間内容を示している。
- * 8 1年次ないし2年次で学んだ外国語をさらに継続して学習するために自由選択の形で開講された、外国語専門の「課外の科目」。但し、ここでの科目は1・2年次のような必須選択科目ではなく、生徒の自発的な意志に基づいた自由選択科目であり、正規のカリキュラム時間外で授業が行われている。
- * 9 国際コースの生徒の中の希望者のために必修クラブと連動させる形で特別に設けられた課外の授業科目で、県教育委員会の講師資格認定を受けた民間のロシア語教師が、正規のカリキュラム時間外で指導に当たっている。

され、英語教諭として教鞭を執られた丹辺文彦氏（現愛知淑徳大学教授）個人の尽力によるところが極めて大きい。一方、国際高校は、1989年に開校した、都内唯一の国際学科単独の新しいタイプの高等学校で、現在、英語以外の外国語を6言語開講しており、ロシア語(1991)もその中の一つである。

都内の私立高校では、早稲田大学高等学院、芝浦工業大学附属第一高校、関東国際高校の3校がロシア語開設の実績を持っている。早稲田大学高等学院のロシア語開設は、ドイツ語、フランス語とともに、旧制高校の早稲田大学附属早稲田高等学院として発足した1920（大正9）年にすでに実現している。³ 現在、同校では、ドイツ語、フランス語、ロシア語の中から選択した第二外国語を1年次から必修科目として学び、選択科目を含めると、3年間で最大13単位履修できる。芝浦工業大学附属第一高校は、すでに1981年3月に閉校しているが、1975～79年度までの5年間、必修科目の第二外国語としてロシア語を開講した。同校のロシア語開設の背景には、スプートニク・ショック

白山利信

(1957) やガガーリンの世界初の有人宇宙飛行(1961)以来、宇宙開発の際立った実績を誇る科学技術大国ソ連への一定の関心が存在していたことに加えて、芝浦工大のロシア語教育に尽力された吉田峰夫氏(当時同大学常務理事)の強い後押しがあった。関東国際高校では、ソ連邦が解体した1991年に、新しい日ロ交流拡大への期待感の中で、外国語科ロシア語が創設され、日本の高校では初めて、専門コースにおける第一外国語としてのロシア語がスタートした。現在、同校にはロシア語コースのほかに中国語コースがあり、各学年とも第一外国語としてそれぞれロシア語、中国語を週6単位時間学習している。

埼玉県では、慶應義塾志木高校と立教高校の2校がロシア語科目を設置している。各校ともに、外国語をはじめとする選択科目が非常に充実しており、国際理解教育の一環として、数多くの英語以外の外国語科目を開設している。慶應義塾志木高校では、すでに述べたように21言語、立教高校では、8言語(ドイツ語、スペイン語、朝鮮語、中国語、フランス語、イタリア語、ロシア語、アラビア語)が設置されている。

首都圏以外の地域のうち、まず北海道では、函館商業、根室西、根室、双葉、札幌静修、札幌国際情報の6校が、ロシア語科目を設置した実績を有している。函館商業高校は、1886(明治19)年創立の函館商業学校(明19.9.17~明28.3.31)、またその後の函館尋常中学校商業専修科(明28.4.1~明32.6.30)を前身校に持つ伝統校で、ロシア語教育の歴史も古く、すでに函館尋常中学校商業専修科時代の1898(明治31)年からロシア語科目が設置され、第二次世界大戦が始まる頃まで継続された。戦後しばらくロシア語教育は中断していたが、1968年、函館商業高校に、商業科のほかに新たに貿易科が創設され、それとともなって翌1969年から同科に第二外国語としてロシア語が再び設置され、1985年まで開講された。函館商業高校を除いた残りの5校では、現在それぞれロシア語教育が実施されているが、中でも特に注目されるのは根室西高校である。同校は1994年にロシア語科目を開設したが、その背景には、根室という地域が北方領土問題を抱えていることに加えて、地元経済の中心が漁業に依っていることもあり、伝統的にロシアとの関わりが深く、さらにソ連邦の解体を受けてロシアとの交流が一段と拡大したことなどにより、高校でのロシア語教育の導入を地域社会が強く望むようになったという事情がある。また同校は、ロシア語を設置した年から、地元住民の要望に応える形で、同校主催の社会人向けロシア語講座を開き、地域と密着したロシア語教育を行っている。

東北・北陸地域で注目されるロシア語設置校は、青森県立青森南高校、富山

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

県立伏木高校、福井県の敦賀気比高校の3校である。青森南高校（外国語科）では、現在、必修科目の第二外国語として3年間ロシア語を学習しているが、ロシア語科目が設置されたのは、1992年8月、青森県とハバロフスク州との友好協定が締結され、自治体間交流が政治・経済・学術・文化・教育など様々な分野で始まり、交流事業の一環として、1994年度より、県の推薦を受けた同校でロシア語教育が実施されることになったという経緯による。同校では、ロシア語開設以来、日本人教諭のほかに、専任のロシア人の外国語指導助手（ALT）が指導に当たっている。⁴ 伏木高校は、1927（昭和2）年創立の伏木商業学校を前身校としているが、すでにその開学と同時にロシア語科目が導入されている。これは、シベリア出兵（1918-22）以後、伏木港における日ソ貿易がしだいに活発化して、一般商業及び日ソ貿易に従事しようと志す者に対して必要な知識と技能を教授するという実務的な目的からである。同商業学校でのロシア語教育は、1935（昭和10）年まで継続された。戦後、新制の伏木高校となり、1968年、貿易科の新設とともに、対岸貿易に貢献する人材の育成を望む地元地域の要請を受けて、ロシア語科目が再び開設された。⁵ その後、時代の変化に対応して貿易科から普通科国際コースに完全に移行した1986年に、ロシア語科目は閉講され、再度中断したが、新たな日ロ関係の始まりにともない、1996年度に再開され、現在に至っている。敦賀気比高校は、関東国際高校に続いて、1993年に国際科ロシア語コースを創設し、第一外国語としてロシア語教育を実施している。1996年度入学生までは、各学年週10単位時間以上ロシア語を学び、3年間で30～33単位履修していたが、現在は、生徒数の減少などの事情により18単位の履修となっている。⁶

5. 高等学校におけるロシア語教育の成果と課題

以上、高等学校における英語以外の外国語教育の諸状況を俯瞰した上で、ロシア語教育の現状と歴史について具体的に眺めたが、最後に、現在の日本の高等学校におけるロシア語教育の成果と課題を示すことにする。

この問題を考えるにあたって、筆者は、青森県立青森南高校の生徒（69名）に対してロシア語学習についてのアンケート調査を実施し（1999年2月。詳細は、臼山1999a：38-57頁を参照）、また全国の各ロシア語設置校の先生方にもロシア語教育に関する聞き取り取材を行った（1998年6月～1999年3月）。その結果、全体として以下のような6つの成果と5つの課題が明らかになった。

白山利信

成果

- ①ロシア語学習を通して、生徒たちが英語以外の外国語の存在をしっかりと実感し、認識している。
- ②生徒たちがロシア語の語学力を向上させることに留まらず、ロシアの文化や社会などに対する理解を深めるとともに、より一層ロシア世界に対する興味を広げている。
- ③ロシア語学習によって、生徒たちの世界に対する視野が広がっている。
- ④生徒たちがロシアやロシア人に対するイメージを良い意味で変えている。
- ⑤ロシア語学習を通して、生徒たちがある種の自信をつけている。
- ⑥ロシア語学習が良い意味で英語学習に対する一定の相乗効果を与えている。

課題

- ①大学入試制度の改善：ごく少数の大学を除いて、ロシア語を受験科目として大学入試に生かすことができない。
- ②高校生用の教材開発：現在、高校生向けに開発されたロシア語学習教材は1冊も市販されていない。⁷
- ③中等教育段階の教授法の研究：教育方法の手探り状態が続いており、高校生に合った教授技術の洗練が求められている。
- ④教師間の情報交換：全国のロシア語教師が互いに情報を交換する機会がなく、多くの場合、孤立したままロシア語教育に取り組んでいる。
- ⑤大学教育との連携：ロシア語教育に関する高校と大学との連続性はもとより、両者のつながり自体が極めて乏しい。

上記の6つの成果は、いずれも高等学校におけるロシア語教育の意義や目的に深くつながる有益な視点を提供している。もっともこれらはロシア語教育だけに限られるものではなく、大なり小なり外国語教育一般に広く当てはまるものとも言え、その意味で、ある種の普遍性を持っている。一方、5つの課題は、今後の日本の高等学校におけるロシア語教育をさらに普及・定着させていくための、またより充実したロシア語教育を実現していくための基本的な目標を明示している。

こうした成果や課題などを踏まえて、今後、教師と学習者である生徒の双方に対する具体的な支援策を広く検討することが急務となっているが、まずは教員間のネットワークづくりを早急に進め、教育現場の貴重な情報を共有し、さらに高等学校と大学とのきめ細やかな協力関係をしっかりと確立していきなが

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

ら、一つ一つの課題を地道に克服していく必要があると思われる。⁸

(うすやま としのぶ・筑波大学)

※最後に、快く聞き取り取材等に応じて下さった各学校関係者の皆さまに、衷心より感謝の意を表します。

注

- ¹ 安芸府中高校は、現在、マレー語のほかに、中国語、朝鮮語、フランス語を開設している。同校の英語以外の外国語教育については、臼山（1999b）4-5 頁を参照。
- ² 前年の 1997 年度には、1998 年度設置の明鏡高校を除いた 18 校のほかに、基督教独立学園高校（山形県、普通科）、石川県立金沢辰巳丘高校（普通科外国語コース英語専攻）、高岡向陵高校（富山県、普通科国際コース）の 3 校でロシア語科目が開講されていたが、現在は休講中である。
- ³ この年は早稲田大学露文科創設と時を同じくしている。早稲田大学の井桁貞義教授は、当時早稲田大学附属早稲田高等学院でロシア語が開設されたのは、大学と高等学院の教育プログラムが現在のように個別的・自立的に組まれているのではなく、両者が全体としてまとまった教育体制を取っていたからではないかと推察されている。
- ⁴ 同校のロシア語科目設置の前年にあたる 1994 年 10 月に、初代のロシア語指導助手（ART）が着任したが、これは、公立高校としては日本初の ART の採用事例である。1998 年度には、北海道根室西高校でも専任の ART を採用している。
- ⁵ 1968 年度入学生は、外国語科目については、事実上ロシア語を第一外国語の必修科目として 3 年間で 10 単位履修した（英語は 9 単位）。1969 年度以降は徐々にロシア語の履修単位数が減り、1977 年度には、ロシア語は必修科目であるものの、2 単位に留まっている（『50 年のあゆみ』1977、83-84 頁）。
- ⁶ 敦賀気比高校では 1993 年に国際科英語コースとロシア語コースが創設され、翌 1994 年には中国語コースと、日本の高校では初めてのハングルコースが設置された。
- ⁷ 市販本ではないが、本年 3 月 31 日に北海道根室西高校（ロシア語教材開発研究委員会、今井裕代表）が過去 6 年間に及ぶ教育実践を生かした高校生向けのロシア語教本を他校に先駆けて発刊した。同教本は、北海道根室高等学校教諭・伊藤元也氏の他、札幌大学教授・匹田軍次氏、東京農業大学講師・梅村博昭氏ら大学関係者の監修協力を受けて開発され、文法説明を最小限に抑え、生徒の興味を引くようにユニークな絵柄や写真を適所に盛り込むなど、視覚重視の工夫がなされている。
- ⁸ 筆者の提案する具体的な支援策に関しては、臼山（1999a）57-59 頁を参照。

臼山利信

主要参考文献

- 臼山利信 (1999a) 「中等教育における多様な外国語教育のさらなる普及・定着を目指して——青森県立青森南高等学校におけるロシア語教育を事例として」, 『ロシア語研究』 12, 25-78 頁。
- 臼山利信編 (1999b) 『日本の中等教育における英語以外の外国語教育』, 東京大学大学院人文社会系研究科米重文樹研究室。
- 金子利喜男 (1996) 「ロシア語教育を導入する高校の急増」, 『日ロ関係年鑑』 8, 札幌大学金子ゼミナール, 345-347 頁。
- 『学校経営に関する資料』 (1998), 東京都教育庁指導部。
- 『北園五十年史』 (1978), 東京都立北園高等学校。
- 『50 年のあゆみ』 (1977), 富山県立伏木高等学校。
- 『函商百年史』 (1989), 北海道函館商業高等学校。
- 『平成 8 年度 高等学校における国際交流等の状況』 (1998), 文部省。

Тосинобу УСУЯМА

Прошлое и настоящее обучения русскому языку в средних школах высшей ступени в Японии

В последнее время на фоне тенденции развития интернационализации и информатизации резко увеличивается количество средних школ высшей ступени, где, помимо английского, проводится обучение другим иностранным языкам. При этом сегодня стало больше таких школ, которые ввели в учебный курс преподавание именно русского языка. В 1997 г. в Японии существовала 21 школа, где преподавали русский язык.

В области обучения иностранным языкам в средних учебных заведениях в Японии наблюдаются два основных направления. Первое — это введение обучения второму иностранному языку в качестве факультативного предмета в ряде школ, созданных в послевоенный период и унаследовавших лучшие учебные традиции довоенного высшего образования. Второе связано с такими изменениями последнего десятилетия, как окончание холодной войны между США и СССР, глобализация в области экономики и информации, застойное состояние японской экономики и др. В соответствии с этими изменениями многие средние школы, получив возможность введения системы «гибкого образования» в новой ситуации, по собственной инициативе ввели в учебные программы, помимо английского, другие иностранные языки.

Что же касается школ с преподаванием русского языка, их отличает прежде

高等学校におけるロシア語教育の現状と課題

всего то, что большинство из них находится на Хоккайдо и на побережье Японского моря. В этих регионах многие школы ввели преподавание русского языка в учебную программу в связи с тем, что после распада СССР (1991) начались расширение и активизация отношений между Японией и Россией на местных уровнях. Здесь обучение русскому языку в основном проводится не в качестве компонента так называемого «общего образования», а как образование с международной направленностью и учетом местных особенностей. В столичном же округе и других районах, где преподавание русского языка не носит такого характера, главная тенденция обучения русскому языку связана с упором на международный и общекультурный аспекты.

В результате проведенного исследования посредством интервьюирования учителей и проведения анкетного опроса учеников обнаружилось различные конкретные достижения и задачи обучения русскому языку в средних школах высшей ступени в Японии. В целом можно сказать, что и преподаватели, и ученики нуждаются в существенной поддержке по следующим позициям.

1. Совершенствование системы вступительных экзаменов в вузы.
2. Разработка различных учебных материалов для учеников в средних школах высшей ступени.
3. Совершенствование методики преподавания русского языка в средних школах высшей ступени.
4. Организация обмена информацией между преподавателями русского языка.
5. Упрочение связей между школьным и вузовским образованиями.